

航空自衛隊山田分屯基地

西口雅人司令が離任

航空自衛隊山田分屯基地の西口雅人司令（42）が、9月15日付で離任されました。

西口司令は、平成22年9月に着任。東日本大震災では、発災直後に町役場に連絡幹部を派遣し、被災の状況を把握。町からの要請による支援内容などの確認をするともに大規

模震災災害派遣命令が発令されるまでの間、近傍災害派遣命令を発令し、必要物資の配布、人命救助、地上消火活動、給水および給食などの支援の陣頭指揮を執りました。西口司令は「当基地には、町出身者やゆかりのある隊員が多く在籍しています。山田に対する強い思いが隊員たちの活動の原動力となっていたと思います。震災はとても悲しい出来事でした。しかし、この

震災により人と人とのつながり、温かみを強く感じました」と、当時を振り返ります。町へのメッセージを尋ねると「子どもたちの笑顔があふれる活気のある町に戻ることを信じています。山田町は、忘れられない町となりました。山田の皆さん、家族一同大変お世話になりました。本当にありがとうございました」と、感謝の言葉を話していました。



震災時の山田分屯基地の隊員による捜索活動。隊員のヘルメットには「皆様と共に」というメッセージが書かれている。

エゾノコウボウムギの自生確認 本町が国内最南端の自生地

被災した船越の前須賀海岸で、北海道に主に分布する多年草エゾノコウボウムギの自生が釜石植物の会（釜石市）の鈴木弘文会長によって確認されました。震災前の2008年に大槌町の吉里吉里海水浴場で自生が確認されていましたが、津波による流出や復旧工事などの影響で群生地が消滅。このため、震災後は本町のエゾノコウボウムギが本州で唯一確認され、国内最南端の自生地となりました。

エゾノコウボウムギは、全国に分布する同じカヤツリグサ科のコウボウムギとは違い、茎の断面が三角形で表面にざらつきがあり、果胞（写真中央のトゲトゲした部分）がやや硬いのが特徴です。北海道から種が海を渡ってたどり着き、条件の良い同海岸で生育したものとみられます。発見した鈴木会長は「エゾノコウボウムギは環境の指標を示す重要なもの。次の世代に残していくことがとても大切です」と話していました。



本町に自生している数は、20株程度と生息数は少ないので、エゾノコウボウムギを見かけた人は間違っても抜かないようご注意ください。